



Title	「ブルーコの反乱」の背景：14世紀のシエナ毛織物工業についての考察を中心に
Author(s)	中山, 明子
Citation	AULA NUOVA イタリアの言語と文化. 2006, 5, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93751
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ブルーコの反乱」の背景

—14世紀のシエナ毛織物工業についての考察を中心に—

中山 明 子

はじめに

「ブルーコの反乱」とは、14世紀後半の経済危機の中で、極貧状態にあったシエナの毛織物工業に関わる下層労働者たちが、経済状況の改善と政治的権利の向上を求めて蜂起した事件のことである。有名なフィレンツェの「チョンピの反乱」のシエナ版にあたるもので、「チョンピ」が羊毛加工業の最下層労働者たちを指す蔑称であるのに対し、「ブルーコ」はシエナの1街区の名称で、1371年の蜂起が「ブルーコの反乱」と呼ばれるのは、ここにいわゆる「チョンピ」たちが集中的に居住していたことに由来する。

これは14世紀において、全ヨーロッパ規模で社会的緊張が高まる中で勃発した数多くの民衆反乱のひとつに位置づけられ⁽¹⁾、フィレンツェでチョンピが立ち上がる7年前に起こった「ブルーコの反乱」は、ペルージャにおける同様の反乱とともに、フィレンツェでの騒乱の一種の先駆形態となったと言われる⁽²⁾。しかし実際の出来事については不明な点も多く、反乱の社会的背景がさまざまな観点で語られてきた「チョンピの反乱」に比べて、当時のシエナの社会状況は、十分に考察されてきたとは言いがたい。また「チョンピの反乱」に直接関わる問題として、綿密な研究が蓄積されたフィレンツェ毛織物工業の発展の歴史に比べて⁽³⁾、シエナの毛織物工業については、ほとんど知られていないと言っても過言ではないだろう。本稿では、こうした現状を考慮し、反乱そのものよりもその社会的背景に注目し、とりわけ毛織物工業に関する主な先行研究に依拠しつつ、この分野における現時点での問題点を整理することを目的とする。

なお本稿は『Aula Nuova』第4号所収の拙稿「14世紀シエナにおける社会的変化をめぐって—マニャーティとポポロー」の第2章の1部（2.3 ブルーコの反乱）となるべき部分であるが⁽⁴⁾、今回はサリンベーニ家とポポロの関係そのものよりも、この反乱の背景となった14世紀におけるシエナの毛織物工業の状況に重点をおいた考察であり、サリンベーニ家の都市政治における挑戦という本筋とは直接関わらない部分がほとんどである点をあらかじめ断っておかなければならない。

1. ブルーコの反乱

1371年7月14日、羊毛加工業に関わる最下層の労働者たち、つまりポポロ・ミヌート（最大多数の“ポポロ”）が飢えに苛立ち、武装して市庁舎へ向かった⁽¹⁾。その要求は、政権から3人のノヴェスキ（最も少数の“ポポロ”）と4人のドディチーニ（中間の数の“ポポロ”）を排斥することであった。さらに、暴徒たちはサリンベーニ家の館を目指した。この一族はシニョリーア政を目指す中で、同盟勢力として常にドディチーニとポポロ・ミヌートを頼ってきたので、ポポロ・ミヌートとしては当然、今度もサリンベーニが加勢してくれると期待しての行動であった。しかしサリンベーニは、この言ってみれば「衝動的な」行動に同調しなかった。本当に頼るべき相手は、コントロールを失った大衆の中には見出せないと考えたのである。期待を裏切られたポポロ・ミヌートは怒りに任せて、サリンベーニが連帯の印に掲げていたポポロの旗を奪い取り、同家につながる者に残酷な制裁を加えた。（サリンベーニとポポロの“因縁”はその後も続くことになるが、ここでは触れない。）

羊毛組合に関係する賃金労働者を先頭にしたポポロ・ミヌートの蜂起は、政治的混沌状況の中で、体制の刷新を求める最初の動きであり、月末にかけて、サリンベーニとドディチーニが主導して、別の意味での刷新を目指して現体制を揺さぶろうとする企ても進行していた。しかしながら7月30

日に再びポポロが蜂起。戦いは彼らの勝利に終わり、ゴンファロニエーリとドディチーニは亡命せざるを得なかった⁽²⁾。

そして8月12日、12人のポポロ（ポポロ・リフォルマトーリ）と3人のノヴェスキによって運営されるリフォルマトーリ政権が樹立され、この改革をもって、ブルーコの反乱はいったん終結する⁽³⁾。この後1385年まで続くリフォルマトーリ政権は、商人寡頭政のノーヴェ体制（1287－1355年）、アルテ主導の“民主的”体制を期待されながら、実効性を発揮できず結局は排他性を強める結果となったドディチ政権（1355－1368年）に比べ、より幅広い層の市民に参加が認められていた。1350－60年代以降、決して直線的に進行したわけではなかったとはいえ一貫して続けられた、社会のより下層に向かって政治的権利を広げる改革が一応の成果をあげたということもできるだろう⁽⁴⁾。

もちろん、この反乱の背景を語るには、当時の都市の経済状況も抜きにするわけにはいかない。ノーヴェ政権崩壊後の相次ぐ改革は期待されたほどの成果がなく、ドディチ政権下においても、社会の最下層の経済状態はまったく改善されていなかったし、相変わらず政治の意思決定から除外され続けていた⁽⁵⁾。もともとこの時期のシエナが内憂外患の危機的状況にあったのは確かで、すべての原因をドディチ政権の力のなさに帰するわけにはいかないが、それにしても内外に抱える諸問題に対処する能力の欠如は明らかだった。特に深刻だったのは財政危機である⁽⁶⁾。直接税を増やさないとすれば、これに対応する方策としては、食料品をはじめとするあらゆる製品に対する消費税の増額か、市民に対する強制公債しか道はなかったが、どちらにしても社会の下層にいる者のほうに重税感が増すことは避けられなかった。結局悪名高い強制公債は、毛織物工業をはじめとする市内の製造業の資金を枯渇させ、一方で流動資金を豊富に有する富裕市民に投資の機会を与えるものであり、彼らを利する結果となって、ますます下層民の不満が高まった⁽⁷⁾。実際、この時期の強制公債が、いかに手工業の世界を含む経済を疲弊させたかという例が、後述の染色工の帳簿に見ら

れる。決して社会の上層に位置するとは言えない小経営者が、1年間の家賃に相当する額の強制公債を割り当てられているのである⁽⁸⁾。一方で多少とも余裕のある経営者は、同業者や職人たちの割り当て分を肩代わりし、利息を得て自らの懐を潤した。

政治的な混乱状況と経済的に困難な局面が一体化して表れる中で、各地で相次いで起こった下層労働者の反乱は、「前」資本主義的形態に発展していたとも言われる手工業の発展とも深いつながりがあったと考えられる。諸経済活動の中で、経営側の収入という点でもっとも実入りの多いのが商・金融業だったとすれば、多くの人件費を要し、結果として「所得再配分」効果がもっとも高かったのは毛織物工業であるという⁽⁹⁾。毛織物の加工・流通において、長年にわたって圧倒的な優位を誇ったフィレンツェでは、一説では人口の約3割がこの部門に関わって生計を立てていたとされる⁽¹⁰⁾。まさに「都市の中のもうひとつの都市」⁽¹¹⁾とも言うべき勢力であり、この部門の動きが都市の政治を左右するほどの力も持ったとしても不思議ではない。ただ、これが他の都市にも当てはまるのかどうかとなれば、いささか疑問である。この点で、14世紀のシエナの毛織物工業の状態と、羊毛組合の位置づけを確認したうえで、「ブルーコの反乱」の意味を再検討する必要があるだろう。

2. 中世シエナの毛織物工業

上記のテーマに関しては、1970年代のS. トルトリの研究が現在においても有効な見取図を示してくれるものと思われる。特に『Bullettino Senese di Storia Patria』誌に掲載された「14世紀及び15世紀初頭のシエナにおける羊毛加工業に関して」と題された論文においては、14世紀を中心にシエナの毛織物工業の発展とその限界、製品の市場における位置付けや、都市の政治におけるアルテの役割などが包括的に論じられている⁽¹⁾。著者自身も断っているように、これは組合の規約や都市条例等を基本史料と

する「原料、製品の質、市場と“産業”全体に関する一般的考察」であって、その限界も強く意識されるべきものである。しかしながら、彼女によって提示された、1300年代のシエナの羊毛加工業の一般的な枠組みは、組合や個々の業者の帳簿のデータ分析等に基づく純粋に経済史的な研究、あるいは毛織物工業に関わる（特に下層の）労働者を中心に据えた社会史的な研究によって補われる点も多いとしても、いまだ有効であり、基本文献としての価値は失われていないと考える。

結論から言えば、シエナの毛織物工業は最盛期でも「中規模」にしか発展せず、いちども国際的な競争力をもつには至らなかった⁽²⁾。近隣のフィレンツェとの差は歴然としているが、ただしこの“産業”がまったく発達しなかったわけではない。また競争力の問題とは別に、毛織物工業は都市経済において重要な役割を果たしていた。作業工程が高度に分業化され、多くの労働力を必要としたからである⁽³⁾。それによって、この業種に関わる同職組合が大きな政治的発言権を獲得するに至った。ただしここでも、シエナの羊毛組合は、フィレンツェで一時期とはいえ、羊毛組合が都市政治において果たしたような決定的役割を演じることは決してなかったのである⁽⁴⁾。

市場向けの毛織物生産のために必要とされる原料、つまり羊毛に関しては、シエナは決して不利だったわけではない。コンタード、特にマレンマ地方は羊の放牧のための牧草地を豊富に提供したし、季節移動の群れも近隣地域からこの地方へ越冬にやってきた。13世紀末には、都市政府もこの状況に注目していた⁽⁵⁾。家庭内での糸紡ぎ・機織作業の伝統と、質は悪くとも豊富な原料によって、毛織物工業の基盤はととのっていたはずで、14世紀前半の経済発展・人口増大期には特に、フィレンツェやピサと同様、その生産量を増やすことが、常に都市政府の課題となったはずである。

しかし一方で、はじめから限界も見えていた。シエナの毛織物工業発展の最大の阻害要因とされる水不足のためである⁽⁶⁾。丘の上にあって近くに大きな川も流れていないシエナでは、水の確保が常に問題であった。

1262年の段階ですでに都市政府は羊毛加工業の将来を憂慮し、泉の整備や、羊毛組合によるその優先的な利用などの措置を講じている⁽⁷⁾。ただどのような対策をとっても、毛織物生産を大規模に発展させるにはやはり無理があった。

有名なヴィッラーニの記述を信じるとすれば、14世紀初頭のフィレンツェでは年間10万反の毛織物が生産されていた⁽⁸⁾。同じ頃、シエナの毛織物生産者の置かれていた状況は、かなり違っていたようである。羊毛組合はその規定の中にひとつの条項を加えようとしていたが、それは年に一度集会を開き、生産の停止を決めるというものであった。おそらくは在庫を整理するための措置であり、外国産高級毛織物に対抗する競争力も、独自の安定した市場も確保できていない状況を示すものと思われる⁽⁹⁾。その後、良質原料の導入によってフィレンツェ産毛織物は高級化し、1430年代末の生産量は年間7～8万反、しかし価格は倍に跳ね上がったという⁽¹⁰⁾。シエナにおいても人口のピーク、コムーネによる羊毛組合への登録料の免除措置、羊毛組合の設備増設の記録などの間接史料から推測すれば、毛織物工業の最大発展期はペスト前10年間（つまり1340年代）とされる⁽¹¹⁾。そしてこの時期に羊毛組合が2つの部門の職人と結んだ契約内容から計算すれば、同時期のシエナの毛織物生産量は、最小で年間2,700反、最大で9,000～10,000反と見積もることができるという⁽¹²⁾。シエナでも14世紀初頭から外国産の高級羊毛が輸入されていたにも関わらず、シエナ産毛織物は輸入毛織物に対抗する質と競争力を確保できず、生産量も、都市の規模からすれば明らかに低水準にとどまっていた。

ところで、良質の輸入原料の使用と技術改良による毛織物の高級化は、フィレンツェ毛織物工業の大規模な発展の契機とされるが、同様の現象はシエナにおいても確認できる。1300年代初頭の関税表には、すでにさまざまな外国産羊毛が存在しており（イギリス産、北アフリカ産等）、1330年代に入るとさらにバリエーションが増える（フランドル・フランス産等）⁽¹³⁾。1370年代には主な羊毛供給者はカタロニア商人となり、カタロニ

ア産、サン・マッテオ産その他、さまざまな産地から原料となる羊毛がもたらされた⁽¹⁴⁾。税額から判断すれば外国産が高級ということになるが、おそらく保護措置のせいではなく価格の実態に比例するものではないかという⁽¹⁵⁾。このように、シエナの毛織物業者も各地から輸入された高級原料を使用できる状況にあった以上、毛織物自体の質が上がりなかったのは主に工程の問題と考えられるが、自国産毛織物の品質を改良し、生産量そのものも増やそうという試みは、14世紀を通じてさかんに行われた⁽¹⁶⁾。

そもそも毛織物業者たちも、フランス・フランドル産の高級毛織物がシエナの商社を通じて領内に流入し、高価格にも関わらず容易に市場に浸透していく様を目にして、地元産よりも外国産の良質羊毛を仕入れ、技術を改良し品質を上げる努力を惜しまなかったはずである。また都市政府としても、域内“産業”保護の視点からも都市内の政治的安定の見地からも、羊毛組合と羊毛加工業の発展は重要で、種々の対応策を講じる必要があった。例えば1334年には、暫定的に、希望者は登録料を払わずに組合の親方になることができると決められ、同時に領内に織物工房を構えようとする者には税が免除された⁽¹⁷⁾。毛織物業者とその工房の数を増やすためにアルテの門戸を広げる措置がとられたのである。同様の対策がピサでも同じ頃に行われているが、ピサではさらに外国（アルプス以北）産の毛織物の取引は自由のまま、国内（イタリア）産の取引を制限し、フィレンツェ産と競合する毛織物工業を保護する色彩がいつそう強いと思われる。トルトリはこのときのシエナでは、輸入制限のような保護措置はとられていないことに注目すべきと述べている⁽¹⁸⁾。

しかし1348年のペスト襲来による急激な人口減少と、その後も続いた疫病・飢饉の蔓延は事態を一変させ、ヨーロッパ全域を襲った経済危機は、シエナ経済にも甚大な影響を与えた。毛織物工業も例外ではなく、最も重要な問題がシエナ産毛織物の質の悪さにあるということが露見した。1387年の羊毛組合による請願では、外国製品の輸入停止措置を求め、自分たちは1カンナあたり1フィオリーノから4フィオリーノに至るバリエーショ

ンのある（つまり市場のさまざまなニーズに応えうる）毛織物を製造していると主張している⁽¹⁹⁾。一方で、おそらくは商人と思われる他の市民は、そのような商品は決して製造されていないと証言しているのである⁽²⁰⁾。ちなみに1383年から1385年におけるピサでの取引では、1カンナあたりの毛織物の平均価格は1.77～2.75フィオーリーノである⁽²¹⁾。これと上記の請願内容を考慮すれば、シエナ産毛織物は中級かあるいはその下に位置していたものと思われる。

フィレンツェ毛織物工業は1300年代後半の市場の縮小に対応して産業構造の転換を図り、みごとに成功したが、それは高級毛織物に専門化することによって、生産量自体は激減しても年間売上高はむしろ増加したというものであった。シエナも必要量を確保しつつ品質を改良しようとしたが、うまくいかなかったらしい。失敗の原因をトルトリはシエナの毛織物があまり「差別化」できなかったことに求めている⁽²²⁾。つまり富裕層の需要に応える高級品を生産することはできず、かといって下層階級の需要を満たす安い量産品に徹するでもなく、言ってみれば中途半端な「中級品」しか生産できなかったことが問題だというのである⁽²³⁾。1354年から1402年においてピサで取引された毛織物の価格を比較してみると、その差が歴然としている。フィレンツェ産毛織物は16.86フィオーリーノから118.85フィオーリーノ、ピサ産毛織物は8.38フィオーリーノから49.92フィオーリーノであるのに対してシエナ産は、17.70フィオーリーノから28.93フィオーリーノである⁽²⁴⁾。少なくともこの数字から見るかぎり、バリエーションの少なさは明らかで、買い手の要求に応えられるとは思えない。結局15世紀の初頭まで手工業、とりわけ毛織物工業の活性化・保護策は続くが、奏効することはなく、最後には「シエナのアルテは全般的に何もしていないし、最悪の状態にある」と嘆かざるを得ない結果となった⁽²⁵⁾。

都市政府が羊毛組合と毛織物工業を保護した理由は、都市経済における重要性と、その政治的な側面のゆえにであった。毛織物生産の工程は細かく分業されており、多くの労働力を必要としたが、そのうちの多くはまた、

必ずしも熟練を必要としない単純作業であり、女性も含めた多くの貧しい住民に仕事を提供しえたからである⁽²⁶⁾。したがって、羊毛組合は商人組合と並んで特権を与えられ、さまざまな保護政策を受けていた⁽²⁷⁾。先述の1334年の規定では、ピサと違って輸入制限措置がとられていないことに言及したが、一般的な流れとしてはシエナの都市コムーネも、他の都市コムーネと同じく、羊毛組合の請願にしたがって外国産毛織物の輸入を制限する措置をとっている。ただし、輸入禁止措置には必ず修正が伴っている⁽²⁸⁾。これは他部門の代表者の請願によるもので、彼らは毛織物の輸入禁止によって商業や他の手工業部門が被る損害に言及し、輸入禁止措置の撤廃を求めた。つまり、経済的・社会的重要性のゆえに毛織物工業を保護する必要性と、いわゆる「消費者」と都市財政の利益のために取引の自由化を図る必要性という、2つの相反する経済政策がある程度まで拮抗していたと思われるのである⁽²⁹⁾。特にシエナの場合は、外国産品を制限すれば、シエナ産は質的にも量的にも豊富と言えないのだから、買い手の選択の範囲は極端に小さくなってしまう。輸入をある程度「自由化」すれば関税収入によって、都市財政も潤うのだから一石二鳥である。現代風に言えば「保護主義」と「自由主義」⁽³⁰⁾の綱引きが行われていたということになるだろうか。

結果として、シエナにおいては14世紀を通じて、強く商人の論理が幅を利かせたと言えるかもしれない⁽³¹⁾。そもそも水不足にしても、地理的なハンディを克服すべく最大限の方策がとられたかどうか不明とする意見もあるほどで⁽³²⁾、シエナ産毛織物の質と生産力の向上は、必ずしもシエナ商人の利益に結びつかなかったため、ある程度まで羊毛組合を保護しても、毛織物工業以外の手工業や商業に携わる都市民の利益も過度に損なわないよう、あえて制限を加えていたのではないかと思われる。これは同時に、羊毛組合の都市における発言権はある程度確保されていても、その主張を政策に反映させる影響力という点では、高度に毛織物工業を発展させた都市に比べて、相当程度弱かったということではないか。

1369年から1385年にかけて、比較的民主的だったと言われるリフォルマトーリ政権に参加した羊毛組合員は62人いるが、全体の6%に満たない数字である⁽³³⁾。単独で都市政策を動かす勢力にはなりえない。そもそも羊毛組合に限らずアルテ自体が、それほどの強い政治的権力を握ってはいなかったのである。「シエナにおいてアルテは、ノーヴェ時代の商人組合を除き、フィレンツェでアルテが獲得したような権力も政治的影響力ももつことはなかった⁽³⁴⁾。」一方、シエナのアルテの政治的重要性がフィレンツェにもっとも近づいたのはノーヴェ体制に続くドディチ政権時代であった⁽³⁵⁾。ノーヴェ時代のいわゆるポポロ・グラッソによる寡頭制に対する反動として、政治改革とアルテ代表者による政権運営が行われたが、内外ともに問題を抱える中で、内部分裂やマニャーティとの癒着関係に陥り、期待したほどの改革の成果が上がらない中で、次第に閉鎖性を強めていった。やはりノーヴェ時代の商人を別にすれば、ある同職組合が政治の場で決定的な発言権と影響力を行使する例は、シエナにおいてはほとんど見られないのである。

ここまでトルトリの研究に基づいて、13世紀後半から15世紀初頭までのシエナの毛織物工業について、おおまかな流れを確認したが、印象的なのは対象となる地理的範囲の小ささである。この考察ではシエナ産毛織物の輸出はほとんど語られない。残念ながら問題にならないのである。また原料羊毛にせよ、毛織物にせよ、輸入品の調達地はほとんどの場合、ピサかフィレンツェである⁽³⁶⁾。非常に地域的な“産業”であるのはたしかで、前世紀後半の国際的金融業が対象とした活動範囲の広さとはかけ離れている。もちろん、フィレンツェ毛織物工業とは雲泥の差がある。したがって、両市で毛織物工業や羊毛組合が獲得するに至った権力が大きく違ったとしても不思議ではない。商業・金融業と並ぶ都市の基幹産業であり、内部に膨大な従属労働者を抱えたフィレンツェの毛織物工業は、規模がシエナの毛織物工業とは比較にならないほど大きく、都市における位置づけも異なる。それならば、この部門に関係する労働者たちの反乱も、たとえ同じような

政治・経済・社会的文脈の中で起こったとしても、都市政治に与えるインパクトという点では、相当な差があったと考えるべきではないだろうか。

3. 14世紀後半の染色工の帳簿より

本章では、ピエロ・グアルドゥッチの『14世紀シエナのある染色工、ランドッチョ・デイ・チェッコ・ドルソ』⁽¹⁾に基づいて、14世紀後半のシエナの毛織物工業が置かれていた状況をもう一度確認することにしたい。この研究のもとになっているのは、1367年から中断をはさんで1383年に至る時期の、ある染色工房の帳簿である。シエナにおいてこの種の史料が残されることはきわめて珍しく、それだけでもたいへん貴重な存在と言えるが、1300年代後半という時代を考慮すれば、さらに重要性は増すことになるだろう。というのも、各種手工業の発展の歴史において、事業経営や労働問題、技術革新上の過渡期といえる時期にあたり、多くの問題点を含むと考えられるからである。

F. メリスとG. ケルビーニに師事したグアルドゥッチは、決して豊富とは言えない史料の中から、染色工の日々の仕事を丹念に抽出し、具体的な染色作業や、原料となる染料についての豊富な情報を提供する。ここに掲載された数値そのものが経済的データとしての価値をもち、今後この分野の研究において貴重な指針となるだろう。しかし、この研究の重要性はそれにとどまらない。彼は日常生活史的な方向性も同時に見失わず、ランドッチョの生活そのものについても幅広く描き出す努力を惜しまないし、その上、工房で働く労働者についても深く掘り下げて検討し、毛織物工業に関わる労働力の問題について興味深い説を投げかけている。まさにケルビーニのいうように、「集団・階層の歴史が、個別例に基づく具体性を失わないためには欠かせない研究⁽²⁾」であり、その意味では、前章のトルトリの研究の成果と相互に補填し合って、さらに価値が高まるといえるのではないだろうか。

3-1 染色工ランドッチョ・デイ・チェッコ・ドルソ

チッタ地区の染色工、ランドッチョ・デイ・チェッコ・ドルソに関する情報はそれほど多くない。彼の残した帳簿は、俗語で商品の動き等を簡潔に記した“日誌”に近いもので、その内容は後で元帳や個別の台帳（“染料帳”など）に転載されるべきものであった⁽³⁾。そうした他の種類の台帳は、彼自身が帳簿の中でその存在に言及しているものの、現存しない。染色活動以外にも彼が行ったさまざまな商業活動に関する記録が含まれ、注文主の名前や商品の質・価格、輸入品なら輸送費やガベッラの額など、豊富な数値データが含まれている。ただし工房の活動に関係のない個人的な条項はほとんど含まれず、彼自身についての情報を引き出すことは難しい。

わかっているのは、ランドッチョが1363年に染色工として登録されていることで、年齢もそこから推測するしかない⁽⁴⁾。また彼の父親チェッコ・ドルソも染色工で、14世紀はじめにチッタ地区の、羊毛組合に関わる職人・労働者が多く居住する地域に工房を構えていた。さらに彼の兄弟、トマッソ・デイ・チェッコ・ドルソ、及びケッロ・デイ・チェッコ・ドルソも染色工で、トマッソは1375年にアルテ所有の工房を年5フィオリーニで借りていた。つまりランドッチョは染色工一家の出身で、この職業に従事するかぎりにおいては、見習い期間の短縮、アルテへの登録、商品の流通経路へのアクセスなどにおいて、相当程度、恵まれていたはずである⁽⁵⁾。

帳簿では、彼の工房で中心となって働く妻のカテリーナの姿が確認できるので、1367年には結婚していたと考えられる。ただ子どもがいたかどうかはわからない。1380年頃にカテリーナが亡くなると、「私たちのマッダレーナ」と呼ばれる女性が彼女に代わって1381年から工房で働くことになるのだが、彼女がランドッチョの娘であるとは言い切れない。これ以外に彼の家族関係に関する情報は得られない⁽⁶⁾。

1363年に染色工としてアルテに登録したとき、彼は仕事上の関係のある2人の紡績工の女性から、年8フィオリーニで部屋を借りていた⁽⁷⁾。そ

の後1368年までの間に彼は別の部屋を購入し、そこに仕事場を移したと思われる。購入自体の記録はないので、価格も不明だが、この工房の階上に部屋を新設あるいは増設するのに最低でも12フィオリーニを費やしている⁽⁸⁾。この頃、工房で働いていたのは彼と妻、ある程度熟練した職人が1人と、4人の徒弟奉公人であった。1367-1378年の帳簿の分析では、約828フィオリーニの収益が上がっていたことになる⁽⁹⁾。工房自体の規模はまだ決して大きくないし、扱った注文も一つ一つは小さなもので、家庭内消費用の小口の仕事まで引き受けている⁽¹⁰⁾。また彼は工房の収益を少しでも上げるため、本業とは直接関係のないいわゆる“副業”にも精を出していた。もちろん染色業が中心であることに変わりはなく、一つ一つの副業も独立して行われたわけではなくて、すべてが同時に工房を舞台に行われていた⁽¹¹⁾。ここで描かれるのは、忙しく立ち働くランドッチョの日常の姿である。「染料の釜の中で毛織物をかき回しつつ、見習いの仕事に目配りし、同業者にわずかながら金を用立て、亜麻織物の端切れを譲ったり、染料用の細葉大青を商ったり…⁽¹²⁾」こうしたさまざまな活動を通じて、彼の工房は次第に大きくなり、彼個人の経済力とともに社会的信用も上昇していったようだ。実際、同じ職人階級の市民の遺言執行人や、残された未成年者の財産管理人に指名されたりもしている⁽¹³⁾。

上記の副業の中でグアルドゥッチが特に注目しているのは、いわゆる高利貸しである⁽¹⁴⁾。1件ごとの金額は非常に小さいし、多くはおそらく、経済的に苦境にある職人仲間や紡績工を助ける形で行われたように思えるが、彼の資産の蓄積に少なからず貢献したはずである⁽¹⁵⁾。ランドッチョは早い時点で、工房を主とする自分自身の生産手段を手に入れており、組合の設備を借りる必要性和、それに伴う負担・義務からは解放されている。比較的恵まれた状況の中で、自由になる資金を手に入れば、周囲の困っている人間にそれを用立て、利益を手にする機会を逃さない。本業・副業を含めた彼の仕事ぶりからはそんな“実業家”の姿が見え隠れする⁽¹⁶⁾。

実際、彼の不動産は増え続ける。1378年には、ピエトロ・ディ・ピエト

ロという人物に3フィオリーニで家を貸しているし、1379年には、ザノービ・デル・バッソという人物からフォンテブランダに住居を購入している⁽¹⁷⁾。価格は36フィオリーニで、修理に15フィオリーニかかっている⁽¹⁸⁾。そして1380年から1381年にかけては、アニョラという女性から家を手に入れたが、これは貸付金の回収のために差し押さえられたものであった⁽¹⁹⁾。彼女自身は紡績工で、職人だった夫の死後、さらにひどい困窮状態に陥ってしまったようだ。ランドッチョはこの家を売却し、事業のための資金を得ているが、貸し付けた金額からすれば、かなり得をしたと思われる⁽²⁰⁾。

1367年－1368年の彼の工房では、先述のように彼と妻以外に、職人・見習い合わせて5人が働いていたが、12年後にはさらに労働者が増えていた。1379－1380年のランドッチョの工房では、彼と妻（その死後はマッダレーナ）以外に“管理人”がいて、他に1人の熟練職人と6人の徒弟奉公人たちがいた。人員は3名増加しただけだが、驚くべきはその売り上げで、収益は2,383フィオリーノに増えている⁽²¹⁾。当時、シエナの通貨の価値が12%下落していることを考慮しても、たいへんな成長である（+188%）⁽²²⁾。またこの頃の課税記録を見ても、彼の成功は明らかである。課税額は10デナーロで、額としては慎ましいものだが、同じ教区の染色工22人と比較すれば、3番目に位置する。しかも上位2人は群を抜いて額が大きい（1位はイアコモ・ディ・グイドで1ソルド5と2分の1デナーロ、2位はマッテオ・ダンブロージョで1ソルド3デナーロ）。この2人を除いた平均課税額は1.72デナーロ、全員の平均でも3.35デナーロなので、ランドッチョの10デナーロは、彼が染色工としては十分に成功を収めていたことを示している⁽²³⁾。

彼の経済的成功は、社会的成功にも結びつくもので、二度にわたって最高行政府の役職に就任することになった。ランドッチョは1373年と1380年に各1度、チッタ地区代表者として、都市政府のメンバーに名を連ねている⁽²⁴⁾。なお、彼の兄弟トマッソも、1372年と1378年に同じく委員となった⁽²⁵⁾。ちなみに当時のリフォルマトーリ政権は、それに先立つノーヴェ、

ドディチ両政権の排他性に比べて、多くの都市民が政権参加の機会を得た“民主的”なものだったとされている。同業者の中では裕福で有力者だったかもしれないが、都市の大ブルジョワ層には遠く及ばない存在だったはずのランドッチョが政権に加わっていることから、それがある意味で事実だったことがわかる。

彼が恒常的に、隣人等に対する小額の貸付を行っていたことはすでに述べたが、彼自身が融資を受けることはほとんどなく、特に1367-1368年の時点では、“銀行”に赴くのはほぼすべて税金、強制公債の払い込みのためである⁽²⁶⁾。ただ1379-1380年になると、工房の生産量が飛躍的に伸びて大口の注文が増えたために、いわゆる専門の毛織物業者たちを相手にするようになり、必要に迫られて貸付を受けることもあった⁽²⁷⁾。こうした金融業者の中には14世紀にはすでにシエナで高利貸しに携わっていたユダヤ人の名前も見られる⁽²⁸⁾。

ちなみに、帳簿から察するにおそらく彼の生涯で1度の旅行は、1367年にローマへ行ったときのものである。仕事上、ローマとは何の関係もないはずである以上、巡礼が目的だったのではないかと考えられる⁽²⁹⁾。このとき以外に、長期にわたって彼が工房を留守にすることはない。

ここまで見てきたように、ランドッチョは染色業において十分な才覚を発揮しつつ、「資本」を有効に活用し、財産と地位を築き上げた。本業に固執することなく、幅広い事業を営む姿は、いわゆる染色工の枠に収まりきるものではない。ただ、それでもやはり彼は“職人”以外の何ものでもなかったとグアルドゥッチは言う⁽³⁰⁾。というのも、ランドッチョは当時の富裕層に一般的だった土地投資には興味がなかったらしい。特にコンタードの農場（ポデーレ）経営は、経済危機の時代に安全策として商人・金融業者に好まれた投資手段だったはずだが、彼は、農産物は市場で購入するほうを選択し、資金はもっぱら事業の拡張に振り向けていた⁽³¹⁾。後の時代から見れば、もう拡大局面に入ることはないシエナの毛織物工業の分野で、無理に投資を続けるよりも、コンタードの土地投資などに目を向けた

ほうが得策だったのかもしれないが、そこが彼の“事業家”として限界だったのかも知れないし、逆に言えば“職人”たる所以だったのかも知れない。

3-2 ランドッチョの工房で働く労働者たち

ランドッチョの工房については、グアルドゥッチが詳細に活動状況を報告しているが、主な対象期間である1367-1368年と1379-1380年のいずれにおいても、まずランドッチョ自身が、経営者としてだけではなく、労働力としても重要な役割を果たしている⁽³²⁾。そして妻のカテリーナもまた、おそらく家事も担いながら、工房に欠かせない労働力であった。ランドッチョが不在の時には、彼に代わって重要な決定も行っている⁽³³⁾。

それ以外の労働者としては、まず1367-1368年の期間では、職人1人と見習い4人がいた。職人というのはクリストファノ・ディ・ジョヴァンニという人物で、9ヶ月と18日しか働いていない。この約9ヶ月の労働に対し、報酬は23フィオーリーノである。年に換算すると30フィオーリーノとなる⁽³⁴⁾。短期間の契約・報酬金額とも、この時期の職人としては一般的なものだという⁽³⁵⁾。4人の見習いの中でもっとも経験があって中心的人物だったと思われるのが、ナンニ・ディ・ニコロ（通称ゴッタ）で、22フィオーリーノの報酬を受け取っていた⁽³⁶⁾。フランチョ・ディ・ジョヴァンニ、アントニオのふたりについては、契約の細かい内容もわかっていて、年齢・経験は異なるものの、両親によって見習いに送り込まれたらしい。報酬はそれぞれ14フィオーリーノ、10フィオーリーノである。見習いのもうひとりとはニコロという人物であった⁽³⁷⁾。

ひと口に「見習い」と言っても、実にさまざまな状態にあったらしいことはたしかである。ここでは比較的短期間の契約で働くわずかな熟練工以外は皆「見習い」ということになっているが、ことばの本来の意味からすれば、かなり異なる使われ方をしているようだ。経済危機は賃金労働者の立場をきわめて劣悪な状況に陥れたらしい。往時の職人の世界における「親方-徒弟関係」は、14世紀末の時点ではすっかり影をひそめていた⁽³⁸⁾。

本来なら親方は、見習いにじっくり「秘伝」を伝える以外に、いわゆる職業倫理のような精神面での教育まで担うはずであったが、金も時間もかかるこのようなシステムはいまや過去のものとなり、見習いたちはわずかな教育期間の後、安い即戦力として重労働を任されていた⁽³⁹⁾。雇い主はこれによって人件費を抑制し、実際には工程の大部分において、「見習い」たちが必要不可欠な労働力となっていたのである。だからいわゆる「見習い」の若者たちと同じ仕事をする大人の労働者もたくさんいた⁽⁴⁰⁾。

ランドッチョの工房のナンニはその典型と思われる。「ゴッタ（通風）」というあだ名のナンニ・ディ・ニコロは、おそらくコンタードの出身で、ランドッチョの工房で働いている間も、出身地との関係が保たれていた。例えばランドッチョに小麦粉などの農産物を売ったり、時折、ワイン作りなどの農作業を手伝うために実家に戻ったりしているのである⁽⁴¹⁾。都市在住の職人と、コンタードとのつながりを示す興味深い1例と思われるが、ゴッタが息子の洗礼費用を払っているところを見ると、彼は世帯主だったと思われる⁽⁴²⁾。このようにコンタード出身の「見習い」工が、クリストファノのような熟練工よりも低い賃金で働き、父母の農作業も手伝いつつ、家族を養っていた様子が想像される。この時期の都市－農村関係に興味を持つ筆者にとって、ランドッチョの帳簿に見られる労働者の中でもっとも興味深い例であるが、12年後の帳簿では、ゴッタの姿はもはや確認されない。

1379－1380年には、熟練工としてアンドレア・ディ・マーノ（通称ペルソ）がいた。彼はわずか半年しかランドッチョの工房での仕事に従事していないが、その報酬は25フィオーリーノである（年51フィオーリーノ）⁽⁴³⁾。「見習い」は、12年前からいたフランチョとニコロ（彼らもまだ「見習い」である）、ルカ、ミケーレ、イアコモ、ソツォ（ソツイーノ）、合わせて6人である⁽⁴⁴⁾。この時期に注目されるのは、職人・見習いたちとは別にジョヴァンニ・トマッシという“管理人”を雇っていたことである⁽⁴⁵⁾。この人物は、主にランドッチョが工房を空ける際にその代役を務め、経営にも深

く関わっていたと思われる。前述のように、ランドッチョが旅行などのため何日も工房を留守にすることはローマ巡礼の機会を除いてなかったが、彼はすでに都市政府の役職につくまでになっており、それ以前よりも多忙だったのはたしかである。またジョヴァンニは、工房の業務以外にもランドッチョを支えており、現存する帳簿自体も何枚かは彼の手によるものである。このように重要な役割を果たしたジョヴァンニだが、残念ながら彼に対する報酬の額はわかっていない⁽⁴⁶⁾。

ランドッチョの工房の様子からも、14世紀後半の毛織物工業の世界で非熟練工を多く使うようになっていたことは確認できるが、極端に固定従業員を減らすというところまでは至っていない⁽⁴⁷⁾。高賃金の熟練工を除いて、比較的固定されたメンバーが働いているし、日雇い労働者に頼る様子はない。もちろん、この史料からだけでは判断できないが、シエナではこうした意味での極端な労働環境の変化は起こっていなかった可能性もある。また1348年のペスト流行後、都市の労働者は逆に労働力不足に乗じて高報酬を要求したため、それに対抗する手段として、フィレンツェやプラートでは、近郊の家内労働者を利用する動きも見られるようになったが、この点でもシエナは多少異なる様相を呈する⁽⁴⁸⁾。

ランドッチョの工房では、紡績作業のひとつ（糸をほぐし、カセに巻きつける作業）を外部の紡毛工に任せていた。量はそれほど多くないが、徐々に増えている（1367年…51リブラ、1378年…325リブラ、1380年…477リブラ）⁽⁴⁹⁾。ここで注目されるのは、すべての紡毛工が都市内に居住しているということで、コンタードで大規模にこの作業が委託されたフィレンツェ、プラートとは状況が違っていたという点である⁽⁵⁰⁾。ランドッチョの工房の経営規模自体がそれほど大きくないので当然かも知れないが、シエナの毛織物工業の発展状況からすれば、都市内の在宅労働者で事足りて、コンタードの家内労働を必要としなかったとしても不思議ではない。またこの結果、ランドッチョのケースから判断すると、多くは女性であったシエナの家内紡毛工は、注文主と直接交渉していた⁽⁵¹⁾。フィレンツェなどのコ

ンタードの家内労働者は、仲介人から原料を受け取り、出来上がり品についても厳しく審査されるが、シエナの家内紡毛工は、そのような状況に置かれていない⁽⁵²⁾。これは推測に過ぎないが、あるいはシエナ産毛織物の質がじゅうぶん改良されなかった原因の一端がここにあるのかもしれない。ちなみに上記の作業の報酬は、1380年には1リブラあたり8デナーロである⁽⁵³⁾。これだけで生計を立てるのは難しいが、家にいて家事をこなしつつ、夫や子どもの収入を補う収入を得るにはよかつただろう⁽⁵⁴⁾。

こうした家内労働者も含めれば、毛織物工業に関わる労働者の数は膨大で、その意味で競争も激しかったと思われるが、一方で、競争が激しいからこそ、女性も含めた一家全員で家計を支える必要に迫られ、家内労働者のような新しい戦力が参入するという状況を生み出していたと考えられる⁽⁵⁵⁾。まさに労働環境の転換期と思われるが、その中で、危機を乗り越えて飛躍を遂げ、国際的に発展したフィレンツェの毛織物工業と、地域産業にとどまったシエナの毛織物工業の規模の差を考慮すれば、労働者の立場を含めた社会状況や、都市とコンタードの関係が多少違った形で発展したとしても、決して不思議ではないと思われる。その差がどの程度のものであれ、当時の両都市の社会的・経済的状况を映しているのは確かであり、他の具体例を検討して、より詳しく考察する必要があるだろう。

おわりに

ここまで、ブルーコの反乱前後のシエナの社会状況と、その背景となるシエナの毛織物工業の発展の歴史について14世紀を中心にふり返ったが、史料制約が大きいとはいえ、反乱そのものの記述史料の検討、毛織物工業の経済史的考察はまだ不十分である。グアルドゥッチの多面的な研究の内容についてもじゅうぶんに消化しきれていないが、今後の課題としたい。また今回、トルトリ、グアルドゥッチの研究を中心にシエナの毛織物工業の発展の経過をたどった結果、フィレンツェとの違いのほうがり浮き彫りに

なったが、トスカーナの農村社会史研究においては、大枠として各都市が同じ経過をたどりつつ、細かな点ではそれぞれが独自の発展を遂げていることが多い。したがってこの状況をふまえて、いたずらに違いを強調するのではなく、個々の問題点をシエナの都市内部にせよ、他の都市との関係にせよ、より大きな枠組みの中に位置づけ、もう一度その意味を検討することが、総合的な都市コムーネの構造理解には欠かせないと考える。一方、今回は扱えなかったサリンベーに家のその後の都市政治における挑戦についても、いずれ15世紀初頭のシエナの状況とあわせて考察する機会をもてればと考えている。

註

はじめに

- (1) 「チョンピの反乱」に関しては以下を参照。M.モラ、Ph.ヴォルフ著、瀬原義生訳、『ヨーロッパ中世末期の民衆運動－青い爪、ジャック、そしてチオンピー』、ミネルヴァ書房、1996年。清水廣一郎、『イタリア中世都市国家研究』、岩波書店、1975年。（特に第5章「「チオンピー揆」に関する二つの記述史料」）。高橋友子、「1378年フィレンツェ都市騒乱－チョンピの反乱」をめぐって－、『立命館文学』475-7号所収、1985年、186～220頁。
- (2) cf. Sandra Tortoli, *Per la storia della produzione laniera a Siena nel Trecento e nei primi anni del Quattrocento*, "Bullettino Senese di Storia Patria", LXXXII-LXXXIII, 1975-1976, pp.220-238. M.モラ、Ph.ヴォルフ前掲書、143～148頁。
- (3) この問題に関しては以下を参照。星野秀利著、齊藤寛海訳、『中世後期フィレンツェ毛織物工業史』、名古屋大学出版会、1995年。森田鉄郎、『中世イタリアの経済と社会－ルネサンスの背景－』、山川出版社、1987年。（特に第5章「中世都市の繁栄の性格－フィレンツェ毛織物工業を中心として－」）。齊藤寛海、『中世後期イタリアの商業と都市』、知泉書館、2002年。（書評：高橋友子、『史学雑誌』第114編、第10号、2005年、81～89頁。同：高田京比子、『西洋史学』第211号、2003年、68～71頁。同：徳橋曜、『西洋史研究』新輯第32号、2003年、129～137頁。）
- (4) 拙稿、「14世紀シエナにおける社会的変化をめぐって－マニャーティとポポロー」、『Aula Nuova』第4号、2004年、45～70頁。

1. ブルーコの反乱

ここでのブルーコの反乱に関する記述は、主に次の研究に依拠している。

Alessandra Carniani, *I Salimbeni quasi una signoria. Tentativi di affermazione politica nella Siena del '300*, Siena, 1995. (In particolare, pp.248-266.)

- (1) Carniani, *op.cit.*, pp.248-249.
- (2) *ibid.*
- (3) *ibid.*
- (4) この問題に関しては以下も参照。Giovanni Cherubini, *I mercanti e il potere*, in *Banchieri e mercanti di Siena*, Roma, 1987, pp.161-220.
- (5) Carniani, *op.cit.*, pp.248-249.
- (6) Piero Guarducci, *Un tintore senese del Trecento. Landoccio di Cecco d'Orso*, Siena, 1998, pp.27-39. また都市財政の公債問題については以下も参照。William M. Bowsky, *Un comune italiano nel Medioevo. Siena sotto il regime dei Nove. 1287-1355*, Bologna, 1986. *ID.*, *Le finanze del Comune di Siena. 1287-1355*, Firenze, 1976.
- (7) *ibid.*
- (8) Guarducci, *op.cit.*, p.51.
- (9) Guarducci, *op.cit.*, pp.27-39.
- (10) ヴィッラーニの描写に基づく。(cf. Guarducci, *op.cit.*, p.32.)
- (11) Guarducci, *op.cit.*, p.32.

2. 中世シエナの毛織物工業

- (1) cf. Tortoli, *op.cit.*
- (2) Tortoli, *op.cit.*, p.228, 232.
- (3) Tortoli, *op.cit.*, pp.235-236.
- (4) *ibid.*
- (5) Tortoli, *op.cit.*, pp.221-222.
- (6) *ibid.*
- (7) *ibid.*
- (8) cf. Tortoli, *op.cit.*, 225.
- (9) Tortoli, *op.cit.*, pp.225-227.
- (10) cf. Tortoli, *op.cit.*, p.225.
- (11) Tortoli, *op.cit.*, pp.226-229.
- (12) *ibid.*
- (13) Tortoli, *op.cit.*, pp.223-225.
- (14) *ibid.*
- (15) *ibid.*

- (16) Tortoli, *op.cit.*, pp.227-234.
- (17) *ibid.*
- (18) *ibid.*
- (19) *ibid.*
- (20) *ibid.*
- (21) *ibid.*
- (22) *ibid.*
- (23) *ibid.*
- (24) *ibid.*
- (25) Tortoli. *op.cit.*, p.238.
- (26) Tortoli, *op.cit.*, pp.235-238.
- (27) *ibid.*
- (28) *ibid.*
- (29) *ibid.*
- (30) *ibid.*
- (31) 特にノーヴェ政権の政策が強く商人＝ポポロ・グラッソの利益に結びついていたことはケルビーニも前掲論文の中で述べている。しかし例えば、毛織物に関わる最下層の労働者による反乱がフィレンツェよりも早く起こり、その結果誕生したポポロ・ミヌート政権が1985年まで続いていることは、アルテの力が弱く、その主張が商人＝ポポロ・グラッソの権益の前に屈したという見方と矛盾するようにも思えるので検証が必要である。ここでは14世紀を通じてとられた一連の経済政策のみを問題としている。
- (32) Guarducci, *op.cit.*, pp.27-39.
- (33) Tortoli, *op.cit.*, p.235.
- (34) *ibid.*
- (35) Tortoli, *op.cit.*, p.235. (nota), cf. Valerie Wainwright, *Conflict and popular government in fourteenth century Siena: il Monte del Dodici, 1355-1368*, in *I ceti dirigenti nella Toscana tardo comunale*, Firenze, 1983, pp.57-80.
- (36) Tortoli, *op.cit.*, pp.224, 233.

3. 14世紀後半の染色工の帳簿より

- (1) cf. Guarducci, *op.cit.*
- (2) Prefazione di G. Cherubini, in Guarducci, *op.cit.*, pp.9-11.
- (3) シエナの国立古文書館に保管された、14世紀に活動した職人の帳簿としてはほとんど唯一のものであるという。羊皮紙装丁の3冊の文書で表紙にそれぞれ①1367 di particolari ②Abbondanza 1377 ③C memorialeと記されている。①は1367年～69年の記録、②は1377年～82年（番号が連続していないので間に空白あり）、③は1377～83

年の記録である。

- (4) Guarducci, *op.cit.*, pp.43-57.
- (5) *ibid.*
- (6) *ibid.* (すでに1379年にランドッチョがこのマッダレーナに帯、ボタン等の装身具を
買い与えた記録が残っているが、親子関係の証明には不十分である。親戚、従業員、
2番目の妻等、あらゆる可能性が排除できない。)
- (7) *ibid.*
- (8) *ibid.*
- (9) *ibid.*
- (10) *ibid.*
- (11) *ibid.*
- (12) *ibid.*
- (13) *ibid.*
- (14) Guarducci, *op.cit.*, pp.153-167.
- (15) *ibid.*
- (16) *ibid.*
- (17) Guarducci, *op.cit.*, p.52.
- (18) *ibid.*
- (19) *ibid.*
- (20) Guarducci, *op.cit.*, pp.55, 156-157.
- (21) Guarducci, *op.cit.*, p. 53.
- (22) *ibid.*
- (23) *ibid.*
- (24) Guarducci, *op.cit.*, p.56.
- (25) *ibid.*
- (26) Guarducci, *op.cit.*, pp.171-178.
- (27) *ibid.*
- (28) *ibid.*
- (29) Guarducci, *op.cit.*, p.47.
- (30) Guarducci, *op.cit.*, pp.55,155,167,177.
- (31) *ibid.*
- (32) Guarducci, *op. cit.*, pp.127-141.
- (33) *ibid.*
- (34) *ibid.*
- (35) *ibid.*
- (36) *ibid.*

(37) *ibid.*

(38) *ibid.*

(39) *ibid.*

(40) *ibid.*

(41) *ibid.*

(42) *ibid.*

(43) *ibid.*

(44) *ibid.*

(45) *ibid.*

(46) *ibid.*

(47) *ibid.*

(48) Guarducci, *op.cit.*, pp.145-149.

(49) *ibid.* (シエナの1リブラは0.3289kgに相当。cf. Guarducci, *op.cit.*, p.22.)

(50) *ibid.* (都市－農村関係については以下も参照。高橋友子、『捨児たちのルネサンス－15世紀イタリアの捨児養育院と都市・農村－』、名古屋大学出版会、2000年。特に第4章「里子の養育と都市＝農村関係」。同、「14-15世紀トスカーナ地方の家族と貧困－都市と農村の葛藤－」、『女性学評論』（神戸女学院大学女性学インスティテュート）第12号、1998年、45～73頁。）

(51) *ibid.*

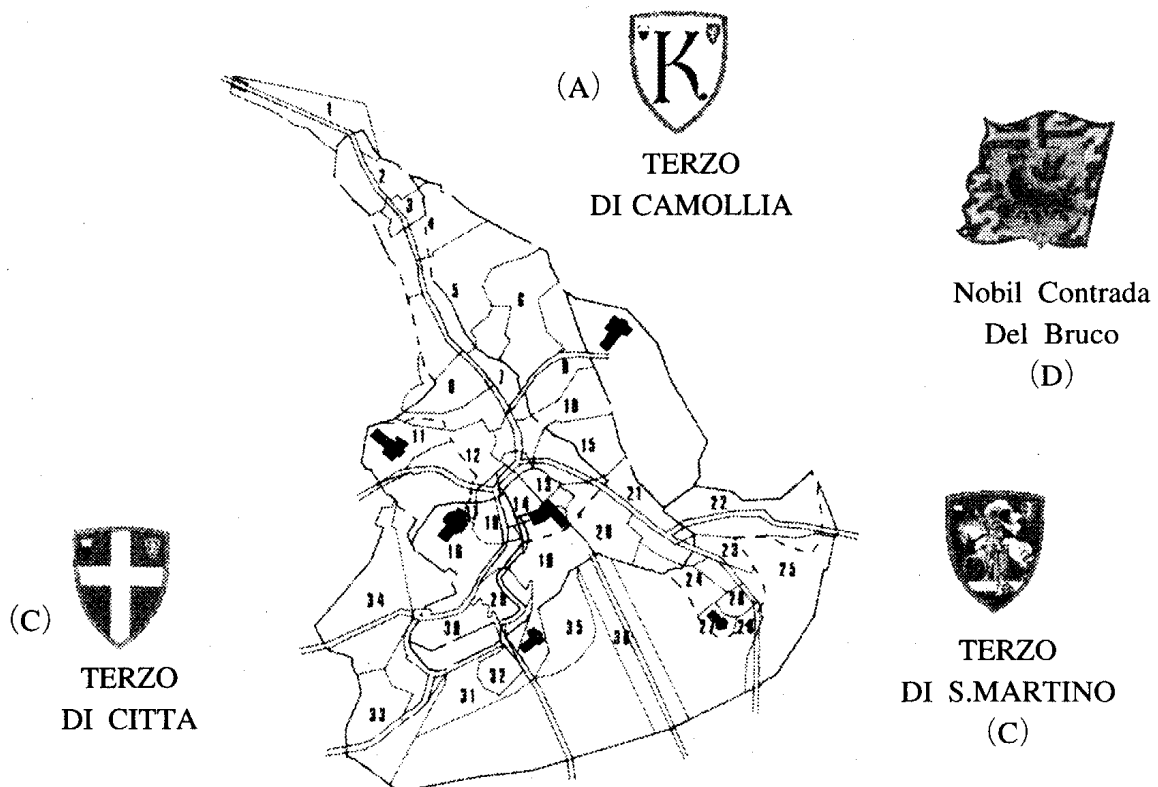
(52) *ibid.*

(53) *ibid.*

(54) *ibid.*

(55) *ibid.*

* 下の地図のものは、バレストラッチとピッチンニによって作成された1318年～1320年の所有財産表に基づくシエナの各教区（popolo）を示したもの。中心にカンポ広場があり、市内は3つの行政上の単位（terzo）に別れる。逆Y字形の上（北）部分がカモッリーア地区（A）、下は左（西）がチッタ地区（B）、右（東）がサン・マルティーノ地区（C）である。また現在にも残るコントラーダと呼ばれる街区は17あって、そのうちのひとつがブルーコである。カモッリーア地区に含まれ、シンボルにブルーコ（いも虫）を冠している。（→D）



Duccio Balestracci, Gabriella Piccinni, *Siena nel Trecento. Assetto urbano e strutture edilizie*, Firenze, 1977. Carta n.1.